
タクシー

露露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タクシー

【Nコード】

N8478G

【作者名】

露露

【あらすじ】

大雨の日。一台のタクシーをめぐる人間模様。的な、超短編。

その日は朝から大雨だった。

一月に降る雨というのはどうしてこんなにも冷たいのだろう。

傘を差しながら急激に冷え始める指の先を器用に擦り、私はアパートからそう遠くない大きな道路を渡った。少しずれ落ちていた鞆をしっかりと抱え直す。

この鞆の中には、それはもう大事な書類が詰め込まれており、雨に濡らすまいと無意識に内側へと抱え込んでいた。

道路を渡った所はちょっとした広場になっており、そこで立ち止まる。

雨の日というのはタクシーが中々つかまらない、ということを思い、私は暫し目的地までの行き方を迷った。

近くに電車もバスもある。

しかし乗り換えや下車駅がはつきりしない。

腕時計を見ると手探りで行ったとしても間に合いそうな、しかし手こずると間に合わなくなりそんな微妙な時間だった。

(どうしよう)

かなり悩んだ。見ればタクシー待ちをしている人も大勢いる。

ここは正式な乗り場ではないため遠慮をしていたらいつまで経っても乗れない一種の戦場でもある。タクシーを待つ時間があるなら電車がバスで行った方がいいような気もした。

(どうしよう)

そうこう考えている内にまた数分が過ぎてしまった。腕時計を見るとまた更に微妙な時間。

タクシーで行くべきか、バスで行くべきか、電車で行くべきか・
・
・
・

(そういえば、雨の日のバスも混んでいてゆっくり目的地を探せる状態じゃないかもしれない)

決まりだ。選択肢はタクシーか電車かに絞られた。さあ、どうする？

うだうだと考えている間にまた数分が過ぎた。これでは駅まで歩いて行く時間があるかどうかも危うい。

私はとうとうタクシーに乗ることに決めた。そろそろスムーズに出発しなければ約束の時間に遅れてしまう。早速戦場へと乗り込んだ。

戦場、といっても私の戦い方はきちんと筋を通すことに徹底している。正式な乗り場ではないにしても暗黙の了解というのが存在する。つまり、皆何となしに並んでいるのである。そこへ私も並んだ。さすがにタクシーの数も少ない。やっと来たと思えば中に人がいる。何度も落胆して焦りがいらいらへと変わる頃、前の人があつと一台拾った。自分の位置も一つ前進する。

待っている間、色々な方法でタクシーを拾う人を見ていた。

道路に出てまで無理やり乗り込む人。割り込もうとして失敗を繰り返すがそれでも割り込むことをやめない人。

上手い具合に乗り入れて来たタクシーの、たまたま横に立っていて、少しも待たずに乗れた人、などなど。

世の中というのはなぜこうも理不尽なのだろうか。真面目にルールを守る人間が得をするようには出来ていない。ルールなどずる賢い人間のためにあるようなものだ。

だからといって私も同じようにしようとは考えない。それを行う勇気がない。実行するには体力も精神力も必要とし、ある意味面倒くさい。だから私はいつも確実な方法を選んでしまう。

空きタクシーは中々来なかった。時間は刻々と過ぎて行った。相変わらずずる賢い人間だけが甘い汁を吸う様を横目に見ながら焦りが増した。そしてそれはいらいらに変わっていく。

（早く来てよ！一台くらいあるでしょ！？間に合わなかったらどうしてくれんのよ！！）

鞆を握る腕に力がこもる。大事な大事な書類。自分の運命がかか

った書類。

もしも本当に遅刻するようなことがあればすべて水の泡だ。すべてが終わる。このビッグチャンスを逃してなるものか！

そこへすつと、一台のタクシーがやって来た。赤い文字が見える。空きだ。

「タクシー！！！」

私は雨に濡れるのも厭わず必死に片手を突き出す。すぐにウィンカーが出て少し過ぎた所で止まった。

（良かった。今から行けば十分間に合う）

ほつと安堵してタクシーに駆け寄る。そうしてドアに手をかけようとした正にその時、事件は起こった。

なんと、私よりも一瞬早く別の手がドアを掴み、乗り込もうとするではないか！

「ちよつ、ちよつと！なに割り込んでるんですか！？どいて下さい！」

こんな輩には毅然とした態度で、はっきり言わなければ分からない。

怒鳴った私を振り返ったのは、その顔にまだ幼さを残す、学生服を着た高校生だった。神経質そうな瞳がじつとこちらを睨む。

「な、なんですか……」

私は少し怯んだ。数々の殴打殺人事件が瞬時に脳裏を掠めた。

「どけとか言うなよ！こういうのは早い者勝ちだろ！？あんたより俺の方が早かったんだ！だから俺のもんだ！」

「な、な、な」

思わず声が震えた。

あり得ない！何だこの言い草は！？

「ちよつとあんた！高校生！こういうのを割り込みって言うのよ！？わ・り・こ・み！！分かる！？」

「割り込みい？あんたこそどうかしてんじゃねえの？どこに人が並

んでんだよ。並んでねえのに割り込みもくそもあるか！」

「あんたみたいなくそガキには見えないかもしれないけどねえ！人は皆並んでんのよ心の中で！！それが社会のルールってやつよ！」

ここに来ていらいらが噴出したようだった。言葉遣いもなんかどうでもいい。勢いにまかせて喋っている。

「ちよつとは学びなさい！高校生！」

「あんた、ばつかじゃねーの？心の中で並ぶって意味わかんねえし！あんたの思い込みだよ全部！おばさん！」

「お、おばっ！？私はまだ35よ！！失礼なっ！！！」

とは言いつつも、内心分かっていた。

高校生から見たら私は十分おばさんだ。

「いいからどけよおばさん！遅刻するじゃねーか！」

「おばさん言うなああ！高校生は歩け！こつちこそ遅刻するわっ！！！」

扉の外でぎゃいぎゃい言い合っていると、運転手が暢気のんきな声で、「お客さーん。乗るの、乗らないのー？」と声を投げる。

二人同時に「俺が」「私が」「乗る！！」「と断言したら、運転手は「なるべく早くねー」とまた暢気に返事をした。

「ああ良かった！空いてますね、乗ります！」

「はあっ！？」

そこへさらなる悲劇がやって来た。

声の主はサラリーマン風の中年男。私たちの言い争いがタクシーとは関係ないと思ったのか、助手席に乗り込もうとしている。

「ちよつとおじさん！私が先に拾ったんですよ！？割り込まないで下さい！！！」

「違う！俺が先にタクシーに触ったんだ！俺が乗る！！！」

「ちよつとちよつと、今更何言ってるんですか！あんたら並んでる風には見えなかったし、あーもう、こつちは急いでるんだ。僕が乗るよー！」

強引に乗り込もうとするその手を高校生が阻止した。男も眉を吊り上げて抵抗する。私もぎゃーぎゃー反論する。

雨は酷くなる一方だった。
時間も刻々と過ぎていく。

私は、とうとう、キレた。

「もっつなんなのよなんなのよあんたたちは！！このガキは適当なことばかり言うし、おっさんはおっさんで勘違いしてるし、いい加減にしてっ！！私はねえ、今日どうしても遅刻できない会議があるのよ！あんたたちにこの私の辛かった道のりなんて分からないわ！35歳、大学を出てから一つの会社でくすぶり続けてきたこの辛さなんて、ええ、分からないでしょうとも！中途半端な年で若い子と比べられて、言う事は説教臭くなって、仕事も中途半端で、今や私は何となく厄介者扱いよ！でも私は諦めなかったわ！やっと来たチャンスに、十年来暖めてきた企画を持ち込んだの！そしてとうとうそれが認められて巨大なプロジェクトとして動き出した！会社も私を認めてくれつつある、私にとって最大のチャンス、そして最後のチャンスなのよ！！だから絶対に遅刻出来ないの！このタクシーには私の人生がかかっているんだからっ！！」

私は胸に溜めていた思いを一気に吐き出した。
途中で涙も出そうになった。

本当に辛かったこの13年という長い年月。ここまで耐えてきて良かったとやっと思えたのだ。

雨音がざあざあと耳に響く。

気付けば高校生とサラリーマンは無言で私を見詰めていた。
私の気持ちも少し落ち着いてくる。

「う、ごめんなさい、少し感情的になってしまっただけ。でも、だから、お願いです！このタクシーを私に譲って下さい！お願いします！」
頭を下げ、懇願する。

耐え切れずに、とうとうぼとり、と、一粒の涙が地に落ちる。

すぐに雨水と同化するのを見た。

「………って、頭下げられてもなあ」

「え？」

思わぬ高校生の声にはつと顔を上げる。目の前には神経質そうな表情が苦々しく歪んでそこにあつた。

「勝手なこと言うなよおばさん！そんな身の上話で同情誘って乗る気なんだろ！？ほんつとわけわかんねえよ！あんただけが悲劇の主人公じゃないんだぜ！？それに今日失敗したって完全に終わるなんて誰が決めたんだ！どうにでもなるだろうが！あんたらに俺がどう映ってるか知らねえけど、俺だつてこのタクシーに人生かかってんだ！今日が何の日か知らないわけないだろ！？大学入試だ！受験だよ受験！こんな制服着てるけどな、俺はこれで3回目の受験なんだ、もう落ちるわけにいかねえんだよ！あんたらには分かんねえよ俺の辛さなんか！親からは過剰に期待されて、でも2回も裏切つたんだ！愚痴愚痴言われる日々にももううんざりしてる！俺だつてプライドがあるからな、有名大学受かつて周りの奴を見返してやりてえ！周りの人間の目がどんなに冷たかつたか、あんたらはそれに2年も耐えてきた俺から未来を奪うつもりか！？もう大学出てる人間には俺の切羽詰まった状況なんて分かりやしねえんだよ！！何も言わずここは俺に譲るべきだ！！」

タクシーにしがみ付いて高校生が叫んだ。

まるでこのチャンスを絶対に逃すまいとする執念が表れているよ
うな気がした。

「ちょっと待って下さい！」

「ああ！？」

今度はあのサラリーマンが一步前に出た。

顔は怒りで紅潮している。

「聞いてればあんたら状況なんか全然ましじゃないか！僕はね、
一人娘が交通事故に遭って病院に運ばれたんだよ！連絡を貰って慌

今から最高速度で飛ばせば間に合う！！

「命が無事ならもう急ぐ必要ないだろ！？受験は俺を待つてくれねえんだよ！どけおっさん！！」

「こっちは人生かかっているんだからね！？会社は私を待つてくれないのよ！どいてあんた！！」

「ばかかあんたらは！？それでも人間か！？事故は事故なんだよ！急いで駆けつけるのが人情つてもんだろうが！どけこら！！」

私たちは三人とも雨に打たれながら押し合い圧し合いを続けた。皆が必死になってタクシーを取り合った。

それぞれの“人生”をかけて。

そこへ、向かいから老女がゆっくりゆっくりと歩いて来ていた。

傘を差してはいるがその手に大きな袋も握られている。運転手がそれを見つけて窓を開け、声をかけた。

「おばあさん、もしかしてタクシーをお探しですか？」

「ええ？へえ。結構な雨が降っておりますもんで、荷物もありますし、今日はたかしいにでも乗りましようかねえ」

「そうですか、じゃあ乗って下さい」

「へえ」

「その荷物、買い物の帰りですか？広告が見えました」

「へえへえ。ちょっと遠いんですけど、ばあげんせえるとやらをしていたもので、行ってきたんです。玉子がひとぱつく10円でねえ。ほっほっほっ」

運転手と老女のやり取りなど全く知らず、私たちは未だ激しくタクシーの取り合いを続けていた。

「私よ！！」

「俺だ！！」

「僕だ！！」

その時、タクシーのドアがぱたんっとならなくなった。油断していたため、あっさり閉まってしまった。

誰かが乗ったのか。

一体誰が!?

「すみませんねえお客さん!今日は臨時休業ですわ!別のタクシー拾って下さい!」

相変わらず暢気な声でそう言いつと、タクシーは軽快に走り去って行った。

呆然とその姿を見送る。

私の いや、私たちの人生を乗せたタクシーを、ただ呆然と見送る。

「おやおや。やっぱり電車で帰りましょうかねえ」

雨はまだまだ降り続く。

ゆっくりとだが確実に歩んで行く老女の後姿が、立ち込めるもやの中に消えて行った。

） F i n ）

(後書き)

何かシユールですかねえ??

ありそつでなさそつな?妄想の世界でした。

読んで下さった方、どうもありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8478g/>

タクシー

2010年10月8日15時07分発行